



Be creative !

自分の“ 推し” を持つ！

1月31日の朝日新聞「ひと」の欄にかわいい記事を見つけた。稚ダコ64日間の飼育日記をまとめた小学2年生の野中風玖（ふく）君（8歳）の記事だ。あまりにかわいいので全文を掲載する。

小さいころからよく浜名湖の生き物の展示施設に連れて行ってもらった。お気に入りはタコ。「タコになりたい。」と茶色の服を好んで身に着けた。

昨春、タコの赤ちゃん、稚ダコの捕獲スポットを職員に教えてもらい、父と一緒に10匹捕まえた。3匹を自宅の水槽で飼育することにして、「マメ」「テナガ」「スカシ」と名づけた。

生シラスを与えたが、食べない。4日目、浜名湖で捕まえたスジエビを与えると食べてもらった。観察記録は「食べた！『うれしかった』（生きている）」夜にエサを食べることに気づき、父に夜中に起こしてもらった。23日目、マメが死んだ。エサとして与えたカニに襲われたようだ。翌日にはテナガも。しばらく泣いた。死んだ稚ダコの黒目はまん丸だった。普段は細長いのに。

「ひとりでさびしくないかな。」スカシの観察に力が入った。黒目は明るい時に細く、暗い時や雨の日は太くなる。腕の長さの変化など、気になることも増えていった。水の濁りにも気を配り、スカシは2か月以上生きた。3匹は庭に埋め、手を合わせた。

64日間の記録をまとめ、「海とさかな」自由研究・作品コンクールで日本水産学会会長賞を受賞した。

「もう一度挑戦し、一日でも長生きさせたい。」

食べ物としては興味はない。家族でタコ焼きを食べても、一人だけ「タコ抜き」にしている。

実際の文章は幼い子にも読みやすく、ひらがなを多くし、いつもはついていないルビが漢字についている。粋な計らいだ。「タコに腕があるのか？タコの足は8本と教えられてきたのに。」調べたら8本のうち腕は6本。3つの対になっていることを知った。彼の写真もかわいいので掲載したかったが、著作権の観点から✕。関心のある人はぜひネットで検索をしてみてください。「しばらく泣いた」その風玖君の様子が何となくわかる。

風玖君の幸せはどこにあるのか。まず、夢中になれる大好きなものがあることだ。風玖君がずっとタコ好きであるかどうかはわからないが、自分の関心の赴くものにとことん付き合う資質がきっと彼には備わっている。二つ目は支える大人が彼の周りにいることだ。生き物展示室の飼育員さん。文章の中には1回しか登場しない飼育員さんだが、彼の日常生活の随所にこの人はきっと存在しているのだろう。次にお父さん。稚ダコにエサを与えるためにお父さんは彼を夜中に起こしている。自分でやった方が楽なのに、お父さんは彼を起こすのである。いつか彼はこのあまりに暖かく、自分を包み込んでくれた大人の存在に気づくであろう。自分自身の深い芯にこのことが根づけば、風玖君もまた飼育員さんやお父さんと同じ大人になれるはずだ。“ 推し” が彼に与えてくれるなによりの幸せである。

今月の言葉 3年生の授業がとりあえず終わる。「最後の授業」の卒業式を待つ。

記すのはもう最後かも名の横の3年1組21番 熊本北高 堀田奨
『卒業－青春の短歌集』より

